

# {XP, YP}構造をめぐる問題

三好 暢博

## 1. はじめに

厳密派生モデルの追及は、極小主義における重要な論点の一つであり、理論的装置の検証を行う際の不可欠な視点といえよう。本発表の目的は、マルコフ型派生モデルを仮定し、Chomsky(2013, 2015)で提案されたラベル付けアルゴリズムの帰結を探索することにある。より具体的には、能格主語の A'-移動が許されないという統語的能格性のもっとも基本的性質が、マルコフ型派生モデルを仮定したラベル付けアルゴリズムから導出されることを示す。

## 2. マルコフ型派生とラベル付けアルゴリズム

Chomsky(2013, 2015)で提案されたラベル付けアルゴリズムは、句構造構築操作から投射という概念を取り除くことを可能とするアルゴリズムである。議論に関係するのはXPとYPをMergeさせた際のLabel決定方法である。(1a)は、YPがコピーを残して移動している事例であり、残った要素であるXPのラベルが全体のラベルとなる。(1b)では、XPとYPに素性が共有されている場合、共有された素性 $\langle\phi, \phi\rangle$ がラベルとなる。

(1)a. [XP, YP<sub>copy</sub>]

b. [XP <sub>$\langle\phi, \dots\rangle$</sub> , YP <sub>$\langle\phi, \dots\rangle$</sub> ]

Chomsky(2015)のPOP+における仮説を再考することから始めよう。ラベル付けアルゴリズムは統語においてラベルに関する情報は表示されていないことを含意する。したがって、当該のアルゴリズムは転送(Transfer)以降に適用されることになる。ここで、(1b)の統語対象物 $\alpha = [XP_{\langle\phi, \dots\rangle}, YP_{\langle\phi, \dots\rangle}]$ が主要部Zと外的併合された構造(2a)を考えてみよう。Zの補部が転送領域となると仮定し、(2a)のYPに内的併合を適用した(2b)において、 $\alpha$ のラベルは、どの程度まで派生計算上のメモリを仮定すべきかという問題を提起する。Chomsky(2015)のPOP+では、(3)のように、フェイズレベルでのメモリが保持されると仮定され、 $\alpha$ のラベルは、 $\langle\phi, \phi\rangle$ とすることが可能であった。

(2) a. [Z, [ $\alpha$  XP <sub>$\langle\phi, \dots\rangle$</sub> , YP <sub>$\langle\phi, \dots\rangle$</sub> ]]

b. YP ... [Z, [ $\alpha$  XP <sub>$\langle\phi, \dots\rangle$</sub> , YP <sub>$\langle\phi, \dots\rangle$</sub> ]<sub>copy</sub>]

(3) The basic principle is that memory is phase-level - as, e.g. in distinguishing copies from repetitions. (Chomsky (2015: 11))

しかし、Chomsky (2021)以降の FormCopy による義務的コントロール分析、Box Theory の導入による copy と repetition の区別が示す理論的方向性は、より制限力の強い派生主義である(4)であろう。マルコフ型派生モデルでは、以前に適用した操作に言及することはない、メモリを仮定しない派生モデルである。マルコフ型派生モデルでは、(2b)の $\alpha$ のラベルが $\langle\phi, \phi\rangle$ となることはない。なぜなら、 $\alpha$ のラベルが $\langle\phi, \phi\rangle$ となるためには、素性が共有されているXPとYPが併合されたというすでに適用された操作の情報が保持されていなければならないからである。(2b)の $\alpha$ のラベルが $\langle\phi, \phi\rangle$ ではなくXPのラベルとなる。ここでのポイントは、どのくらい制限の強い派生モデルを仮定するかにより、ラベルに関する予測が異なることである。ラベル付けから派生モデルを検証することが可能となるといえよう。

(4) Derivations are Markovian

(Chomsky (2021: 16))

無論、(2b)から経験的予測を引き出すことは不可能である。ここで、単独でラベルとして機能できない弱い要素(弱主要部)があるという(Chomsky (2015: 9))の仮説を採用し、(5)の派生を検討しよう。(5a)では、弱主要部ZとYPが併合され、さらに、XPが併合された派生を示している。XPと $\beta$ のラベルであるZは素性を共有しているため統語対象物 $\alpha$ のラベルが $\langle\phi, \phi\rangle$ となる。しかし、(5a)のXPに内的併合が適用された場合には、マルコフ型派生モデルは従来とは異なる予測をする。XPがコピーであるため、 $\beta$ のラベルであるZが $\alpha$ のラベルとなるはずである。しかし、Zが弱主要部であるため、Zは $\alpha$ のラベルのとはならず、ラベルが決定できない。

(5)  $\alpha$  XP <sub>$\langle\phi, \dots\rangle$</sub> , [ $\beta$  Z<sub>weak $\langle\phi, \dots\rangle$</sub> , YP]]

\* [ $\alpha$  XP <sub>$\langle\phi, \dots\rangle$</sub> ]<sub>copy</sub>; [ $\beta$  Z<sub>weak $\langle\phi, \dots\rangle$</sub> , YP]]

したがって、マルコフ型派生モデルを仮定したラベル付けアルゴリズムは、弱主要部の指定部を占める要素は、さらなる内的併合の対象とはならないことを予測する。

### 3. 統語的能格性とラベル付けアルゴリズム

本発表では、Polinsky(2016)の統語的能格性の定義(6)を採用した。能格主語が空所を残して A'-移動できないという観察が統語的能格の特性であるという見解である。(7)は西グリーンランド語の例であるが、同種の現象がトンガ語、チュクチ語、ハルコメレム語等の統語的能格言語で確認されている。

(6) Syntactic ergativity: the inaccessibility of ergative arguments to A-bar movement with a gap in the base position, as contrasted with the accessibility of absolutive arguments to such movement. (Polinsky (2016:16))

(7) \* angut [ \_\_\_<sub>ERG</sub> aallaat tigu-sima-sa-a ]

man.ABS [ \_\_\_<sub>gun.ABS</sub> take-PRF-REL.TRANS-3SG.SG ]

Intended: the man who took the gun

(West Greenlandic (Bittner 1994: 58))

本発表では、(6)の統語的能格性を次のように説明した。能格主語 DP<sub>Erg</sub> は弱主要部 T<sub>Ergative</sub> により認可される。T<sub>Ergative</sub> は弱主要部であるため、(8a)の TP に相当する  $\alpha$  のラベルは< $\phi, \phi$ >となる。しかし、もし、(8b)のように、能格主語 DP<sub>Erg</sub> にさらなる内的併合が適用された場合、T<sub>Ergative</sub> が弱主要部であるため、 $\alpha$  のラベルは決定されず、能格主語が空所を残して A'-移動することは許されない。

(8) a. [ $\alpha$  DP<sub>Erg< $\phi, \phi$ ></sub> [ $\beta$  T<sub>Erg< $\phi, \phi$ ></sub> YP]]

b. [ $\alpha$  ~~DP~~<sub>Erg< $\phi, \phi$ >copy</sub> [ $\beta$  T<sub>Erg< $\phi, \phi$ ></sub> YP]]

### 4. さらなる予測

本発表の分析は、一度、弱主要部の指定部位置に併合された要素は、さらなる内的併合の対象とはならないというものである。したがって、弱主要部 T<sub>Ergative</sub> の指定部に再述代名詞 (resumptive pronoun) が生じた場合や当該の指定部位置を経由しなければ、ラベル付けに関する問題は生じないと予測される。この予測が正しいことを示したのが(9)である。(9a)ではトンガ語の例で、再述代名詞 *ne* の出現が義務的である限りにおいて能格主語を関係節化が可能である。また、(9b)はハルコメレム語では反一致 (anti-agreement) により能格主語を関係節化が可能となることを示している。A'-移動は主語位置を経由せず直接 CP の指定部へ移動しているという反一致構文の主語の標準的な分析(Bošković (2016); Ouhalla (1993); Schneider-Zioga (2007))が正しい限りにおいて、本発表の予測が裏付けられることになる。

(9) a. ki he hefine<sub>i</sub> [na'e kai ne<sub>i</sub> 'a e ika ]  
to SPEC woman PST eat 3sg ABS SPEC fish

'to a woman who ate the fish'

(Otsuka (2017: 994))

b. Tl'ó te ilé swíyeqe [q'óy-t te qwá:l]

3.INDEPENDENT DET here man kill-TR DET mosquito

"This is the man who killed the mosquito"

(Polinsky (2016: 25))

### 主要参考文献

Bittner, M. (1994) *Case, Scope, and Binding*. Kluwer Academic Press. Bošković, Ž. (2016) "On the timing of labeling: Deducing comp-trace effects, the subject condition, the adjunct condition, and tucking in from labeling." *The Linguistic Review* 33, 17–66. Chomsky, N. (2013) "Problems of projection," *Lingua* 130, 33–49. Chomsky, N. (2015) "Problems of projection: Extensions," in *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, 3–16. John Benjamins. Chomsky, N. (2021) "Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go," *Gengo Kenkyū* 160, 1–41. Chomsky, N. (in press) "The miracle creed and SMT," ms. Otsuka Y. (2017) "Ergative-Accusative Pattern in Tongan," *The Oxford Handbook of Ergativity*, 989–1006, Oxford. Ouhalla, J. (1993) "Subject-extraction, negation and the anti-agreement effect," *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 477–518. Polinsky, M. (2016) *Deconstructing Ergativity: Two Types of Ergative Languages and Their Features*. Oxford. Schneider-Zioga, P. (2007) "Anti-agreement, anti-locality and minimality: The syntax of dislocated subjects," *Natural Language and Linguistic Theory* 25: 403–446.